

いう意味で教父を現代に（再び）生かす道はないのだろうか、いささか性急の誹りを免れないかも知れないが、筆者としてはむしろこうした展望をこそシンポジウムに期待しているのだが。

篠崎氏の提題は、以上の問題意識とも密接に関係してくる。氏は「園のドラマ」を題材にニュッサのグレゴリオスの『創世記』解釈の「正当性」を検討するが、現代日本人がギリシア教父のテキストに直面して覚える違和感を正直に吐露した、その意味では提題者の誠実さに感銘すら受けた。ただその基調は、法的／倫理的／予型論的解釈がキリスト教信仰によるいわば「理論負荷的」読み込みとしてテキスト本来の読みを歪め、物語作者（ヤハウィスト？）の意図を逸したと断罪して、教父の負の側面を強調する結果となった。この点で氏の論調は、無自覚にか意図的にか、近代的聖書学の主張と軌を一にする。しかし初めから「〈予めの枠組〉を持ち込まない」読みが果たして可能なのか、歴史的批判的方法がそれを保証するのか、また可能だとして、それにどれほど意味があるのだろうか、読者（解釈者、研究者）の側の主体性（とその変容）を括弧に入れた聖書解釈の行き着く先は、結局オリエント諸民族の断片的な宗教思想を歴史的に積分した代物以外ではあるまい。それは何やら死体解剖の所見に思えてならない。テキストの解釈一般と聖書の解釈は同じなのか、つまり通常解釈とは異なる特権的なテキストがはたして存在するのだろうか、われわれの手にしている「聖書」が真に生命をもった言葉＝〈聖書〉となるのはいつの日のことなのであろうか

意見

所与としてのテキスト

田島 照久

提題1「聖書解釈における正当性の問題——伝統か〈時のしるし〉か——」において提題者は発表の論旨に沿って、「テキストの不適切な読み込み」の例として、『創世記』冒頭の“in principio”の解釈に「イエス・キリスト」を持ち込むことを挙げ、これなどは到底承認出来る解釈ではないと語られた。それに対して筆者は舌足らずの反論めいた意見を述べたが、改めて提題者が提起された問題全体について考えてみたい。

提題の骨子をまとめれば、「聖書」を「テキスト」としてとらえた上で、「テキスト

の読み」と「テキストの解釈」をまず区別し、「テキストの読み」には「歴史批判的な方法による」「聖書学」によってもたらされた「成果」が「有効利用」されるべきであるとし、こうした知見を用いた「テキストの客観的な読み」なるものを想定した上で、この「テキストの客観的な読み」と「調和する」解釈を「適切な解釈」、不調和なものを「不適切な読み込み」と判別すべきであると主張される。

提題者は「不適切な読み込み」の具体例としてギリシア教父による『創世記』の「園のドラマ解釈」を挙げる。「蛇」についてヤハウィストは「造られた生き物の中でもっとも賢いもの」と述べるだけであり、教父たちが解釈しているような「罪の父」「人間を欺くサタン」という「神の敵対者」としての思想はヤハウィストの時代まだなかったことを指摘し、「教父たちの解釈が〈テキストの読み〉とは調和しない場合にどう考えるかという問題」として「聖書解釈の正当性」について問題提起する。

「正当性」という概念を持ち出せば、極めてラディカルな局面まで原理的には問題とされるであろう。提題者は「正統／異端の決定それ自体は正統とされた側の聖書解釈の正しさを立証するものではない」と述べておられるので、「歴史批判的な方法による聖書学の成果」とも関連した問題からいえば、その説教や神学講義の内容がカトリックの教義を逸脱しているとしてドイツのパダボルン大学での講義禁止、神父の権限剥奪をされたオイゲン・ドレーバーマン神父の聖書解釈なども問題の視野に入るであろう。しかし今は意志決定主体としてのカトリック教会という問題には立ち入らず、学問的領域の問題としてのみ考えてみる。

提題者の意図に従えば、「ギリシア教父たちの不適切な読み込みによる、聖書の不適切な解釈をわれわれはどう受けとめるか」ということになろう。

この場合「不適切な読み込み」とは提題者によれば「テキストの歴史批判的方法による聖書学の成果からみた客観性に合わない読み込み」と理解されるので、その意味での不適切な解釈は、いくつかの例で示されたように実際ギリシア教父のテキスト解釈の随所に認められるであろう。つまり例示された場合でいえば、ギリシア教父の解釈はこの場合「J資料」のいわば訓詁学的な資料としての適性に関しては否定されざるを得ない。

ならば教父たちのテキスト解釈はどのような意味を持つのか。端的にいえば、教父たちのテキスト解釈が新たな「テキスト」と成るのである。

語の意味とは結局はその語がいかに使用されるかということであるならば、テキストの解釈自体が新たな「テキスト」とされねばならない。

「J資料」をテキストとして成立した教父の解釈が「新たなテキスト」と成ったとき、「蛇とサタン」の結びつきの内的意味連関は改めてそこで問われてこよう。

中世に入ると「注解 (expositio)」はノイロンがシナプスを伸ばしていく様に一切の文脈的制約を超えて聖書の語句をつなげていく。その意図は何であったのか。例えばエックハルトにとっては、聖書解釈は聴く者の内にゆらぎを与える為の手立てであった。「エッ」と自らの内に落差が露わになってくるようなささやかな覚醒のためのゆらぎを与えることであった。

意見

中川 純男

篠崎氏は、「テキストの読み」と「テキストの解釈」とを区別しつつ、ギリシア教父による聖書解釈の問題性を鋭く指摘された。教父の聖書解釈が現代の聖書学に支えられた今日的な「テキストの読み」にただちに貢献するものでないことは、ギリシア教父の研究者といえども認めるざるをえないであろう。しかし、水垣氏の提題は、ギリシア教父の聖書解釈が、篠崎氏の区分による意味での「テキストの解釈」ではないことを明らかにしたと思われる。水垣氏は、ギリシア教父にとって聖書解釈とは、聖書のことばを「現在のなものとして受け取る」読み方であり理解の仕方であると指摘された。このことはギリシア教父の聖書解釈が、あらかじめ用意された概念の枠組みの中で、あるいは聖書に含まれていない概念を鍵としてテキストを読みかえるといった意味での「解釈」とは別の「枠組み」の中で動いていたことを告げている。問題は二つある。一つは「テキスト」としての聖書とは何かという問題である。われわれに与えられた聖書は、たんなるヤハウィスト文書ではない。聖書に文書の全体性を認めるなら、その「著者の意図」はヤハウィストの意図と同一ではないであろう。もう一つは「テキストの読み」の現在性はどのようにして実現するのかという問題である。お二人の提題が一致して指し示しているように、聖書の読みは、読み手である人間とその世界の中でしか現在性を獲得することができない。しかしこのことはたんに読み